

---

# ショートショート集

( ‘ ’ ) ウボア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ショートショート集

### 【Nコード】

N1389G

### 【作者名】

（ 、 ） ウボア

### 【あらすじ】

たくさんショートショートが入っています。

## 虎

ある国の草原に、一頭の虎が居た。

この虎の名前は、「タイガー」。なんともセンスのない名前だが、本人は気に入っているようだ。

ところで、この虎はとてもお腹をすかせていた。もう三日三晩、何も食べていないようだ。

この草原、いや、この国自体に、草食動物というものが全然いないのだ。ほとんどの動物は、肉食動物である。

タイガーのまわりにも、十頭ほどの虎が見えた。

「腹へったなあ。草食動物ども、いないかなあ。」

虎のくせに喋るなんて前代未聞であるが、このセリフはあくまでも心の中で言っているようだ。

「お、いたいた。あいつ食ってやつか。」

どうやら、一頭の鹿がいたようだ。タイガーは、全力疾走で鹿をおいかける。

だが、まわりの虎もそれに気づいたらしく、タイガーについていく。タイガーが鹿を捕まえた。後ろにつづいていた虎たちは、タイガーの上に覆いかぶさるようにして、鹿に牙をむけた。

ガキン！

虎どうしが、牙をお互いの顔に刺してしまった。

生き残ったのは、タイガーのみ。

死んでいるまわりの虎たちを横目に、タイガーは鹿をむしゃむしゃと食べ始めた。

## ゲーム（前書き）

二つのショートショートが入っています。

## ゲーム

### ゲーム

やあ。俺の名前は西田健一。職業はもとサラリーマンだ。

俺は、小学二年生のころからゲームをしていた。最初は、一日一時間をまもっていたけど、だんだん一日二時間、一日三時間とふえていき、小学六年生のころは、一日十時間くらいやっていた。それくらい、ゲームがすきだったのだ。

だが、ゲームをやりすぎて勉強が頭に入らなくなり、中学受験ではすべりどめ含めて全て落ちてしまった。だが、また高校受験で頑張ればいいやと思い、まだ、ゲームをずっとやっていた。もちろん、勉強などというものは全くやらず、定期テストも学校を休んでのがれていた。

高校受験は、底辺校になんとかうかったが、ゲームに熱中しすぎてほとんど学校にはいつていなかった。不登校認定はされず、ただ休みがちな生徒と見られていた。

大学も、底辺校になんとかうかった。学部は工業学部。だが、一日中ゲームをやっている俺は、やはり学校にはいかなかった。もはや、行っているも行っていないも同じで、学歴のために大学に行ったようなものだった。

そして、サラリーマンになることができたが、今は、無職である。ゲームに熱中しすぎて、朝早くから会社へ出かけることができなく

なつたのだ。

ゲームのせいで、俺の人生はめちゃくちゃになった。

文字数あわせです

あいうえおあいうえおあいうえお小説小説小説あいうえおあいうえ  
お小説小説あいうえおあいうえお

## ウォーターライダー

山田志県大里町にある、巨大なスイミングパーク「スーパーワールド」。

今日は、ある小学生のグループがここへ遊びにきていた。

このスーパーワールドには、三つのウォーターライダーがある。

一つ目は、トンネルに覆われている、とても長いライダー。

二つ目は、とても開放的で、スリルたっぷりのライダー。

三つ目は、ごくふつうのライダー。

小学生は、やっぱりウォーターライダーが大好きだ。この小学生グループのうちの一人が、言った。

「チューブスネイク（一つ目のライダー）にのろうよ。」

このライダーは、非常に高い位置から落ちる。そのため、かなり長い階段をのぼらなければいけない。

階段をのぼりきった小学生のグループは、やはり少し怖いのか、誰が最初にかくのかじゃんけんで決めることになった。

結果、のろうと言い出した少年が一番にすべることになった。

少年の順番になった。かなりきつい傾斜のチューブライダーを、滑っていく。

「うつひょー、気持ちいい。」

右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい傾斜をおり・・・

さすが、長いことで有名なウォータースライダーだ。びつくりしてしまうほど、長い。だが、ウォータースライダーをこよなく愛しているこの少年は、決して飽きることはなかった。

右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい傾斜を  
おり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい  
傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、  
きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふ  
られ、きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、  
左にふられ、きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふ  
られ、左にふられ、きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、  
右にふられ、左にふられ、きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふ  
られ、右にふられ、左にふられ、きつい傾斜をおり、右にふられ、  
左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい傾斜をおり、右にふ  
られ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい傾斜をおり、  
右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい傾斜を  
おり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい  
傾斜をおり・・・

長い。いくらなんでも長すぎる。ここまで長くしたら、いろいろ問  
題もでるんじゃないのか。

右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい傾斜を  
おり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、きつい  
傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふられ、  
きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、左にふ  
られ、きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふられ、  
左にふられ、きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、右にふ  
られ、左にふられ、きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふられ、  
右にふられ、左にふられ、きつい傾斜をおり、右にふられ、左にふ





まり仲良くなかったのか、無視してかえって行ってしまっていた。

## 遭難

ある男が、スキー場でスキーをしていた。

男が滑っていたゲレンデはとても傾斜が急で、よくふぶくゲレンデだった。

男は、スキーが大の得意だった。パラレルターンで、シュツシュツと雪の音をたてながら物凄いスピードで滑っていく。

だが、ゲレンデの中腹あたりでこけたようだ。スキー板はゲレンデの横をむき、木だらけのところにつっこんでしまった。

そこにはひもでさえぎられているようになっていたが、男の勢いが強すぎて、ひもをきってしまったようだ。

ひもには、このようなことがかいてある看板があった。

「魔のガレン沢　こちらへ落ちると、もどってこれません。」

男は、すでにこの看板をしかった。大急ぎでもどろうとしたが、スキー板の勢いはとまらない。

男は、木にどんどんとぶつかる。顔は既に血だらけになっていた。

スキー板も、木にあたって変な方向にまがる。それにあわせて、男の足がぐにゃつとまがった。

何十分もすべった。やっとのことで、スキー板がとまった。

だが、まわりを見渡すと、木だらけ。どっちがどっちなのかも、わからない。

遭難してしまった。どうしよう。男は、右へと歩いていった。こちらがゲレンデ側なのかは、わからないが。

しかし、歩いたとき足の異変に気づいた。両足が変な方向へとまがり、歩くと足がとてもいたいのだ。

しかたなく、男はそこで眠ることにした。

その夜は、吹雪だった。男は、二度と目覚めることはなかった。

## 地震

地震が多いことで有名なある都道府県のある町の崖のすぐそばに、一人の少年とその母親が住んでいた。

父親は大昔おきた大地震で既に死んでいて、少年がたよりにできるのは生き残った母親だけであつた。

少年と母親は、父親がいなくても、毎日楽しくすごしていた。

ある日。少年が住んでいる家がある地域に、大地震がおきた。

少年と母親は、なんとか助かった。お互いは抱き合つて喜んだ。

次の日、その大地震の大きな余震がおきた。

少年が、大怪我をした。だが、死にはしなかった。

死にそうになりながらも、なんとか耐え抜いた少年を見て、母親は泣いて喜んだ。

さらに次の日、またもや大きな余震がおきた。

少年の母親が、ちよつとした怪我をした。だが、かすりきず程度で、死にはしなかったので、少年は泣いて喜んだ。

その次の日、またしても大きな余震がおきた。

少年と母親が、一緒に大怪我をした。少年の母親は、血だらけの手で少年を抱きしめ、泣いて喜んだ。少年もまた、泣いて喜んだ。

さらにその次の日、また大きな余震がおきた。

少年が少し怪我をしたが、大事には至らなかった。少年の母親は、とても喜んだ。

その次の日、また大きな余震がおきた。

少年の母親が、がれきに潰されて死んだ。

少年は嘆き、悲しみ、そして苦しんだ。

少年がたよりにできる人は、もう一人もない。

母親が死んだ次の日の夜、少年は、明日、家の近くにあつた崖から身を投げようと決心した。

その次の日の早朝、ふたたび大きな余震がおきた。  
少年は死んだ。

## 変身

ある県に、一人の少し性格が変わった少年が居た。  
名前は……ここでは、苗字のイニシャルである<sup>オ</sup>と言っておこ  
う。

〇は、先述したとおり、性格がだいぶ変わっていた。やさしくして  
くる子には厳しく、いじめてくる子にはやさしくしたり、勉強がで  
きないのにガリ勉強だったり、とにかく変わっていた。

五月のさわやかな朝、〇が起きると、目の前は真っ暗であった。し  
かも、布団の中にいたはずなのに広く走れる空間だ。

走ってジャンプすると、体がかなり浮いた。

不思議に思った〇は、自分の体を見てみた。

つまようじのように細い足。同じくつまようじのように細い手。そ  
して、その足と手は、たくさんあった。手足は実際にたくさんある  
のではなく、〇からはたくさんあるように見えたのだ。

このとき〇を見た人がいたら、びっくりしていたかもしれない。何  
故なら、〇はハエになっっていたからだ。

ハエになってからの生活は、〇にとっては、なかなか楽しかったよ  
うだ。

空を飛べるからどこへでも行ける。

だが、寿命が近づいてくると、死の恐怖に追われるはめになった。  
飛べなくもなつて、前も見えにくいし、〇はハエの生活にだんだん  
嫌気がさしてきた。

そして、寿命が来た。Oは、パタリと倒れて死んだ。

それと同時に、Oは人間に戻った。

普段の生活には戻ったが、親やクラスメイト、先生たちに何度も説明された。

実は、人間に戻ったとき既に月日はかなり過ぎており、六月中旬だったのだ。それまで、どこにもOは見当たらなかったらしい。



## テント

奈多氏は、おととい顔が見えぬ不思議なひとから不思議なテントをもらった。

息を十秒ほどふきかけるとふくらみ、ふくらんでから息を十秒ふきかけるとしぼむ。

中はとても広かった。

奈多氏は、ここに住んでいた。

家賃は、もちろんタダ。それに、意外と住みごこちがよかった。

もらったときの話をしてみよう。

おとといの朝、あてもなくふらついていたところ、黒いマントをかむっているひとに話しかけられた。

「このテント、いいませんか。家賃なしで、住めますよ。」

「はあ？」

「いや、だからいいませんか。タダでお貸しますよ。」

「えーと・・・意味がよくわからないんだけど。」

「このテントは、息をふきかけるとふくらみます。中に入ると、四次元空間につながっています。とはいっても、危険なものではなく、四次元空間に間取りをいっぱいとおるのです。どうですか？ここへ引っ越してみませんか？」

「うーん・・・。」

「タダですよ、タダ。これほどお得なことは、めったにありません。」

「

「じゃあ一応もらっとくわ。」

「ありがとうございます。」

こうして奈多氏は自分の家売り、このテントに住むことにした。手元には現金3000万円。家売って得た利益だ。

たった今、外で息をハアハアしているジョギング中のおじさんが、このテントをめずらしげに見ている。

テントは、だんだんしぼんでいく。

そして、最後、テントは奈多氏にぴったりとくつつき、奈多氏は息ができなくなった。

「うわあああ、助けてくれえ。」

おじさんは、中に人がいるとも気づかず、しばらくテントをながめていた。

## 留置場

おれは今、手錠と腰縄をされて歩いている。

「手錠」ときいたからにはもうわかつているかもしれないが、おれは捕まったのだ。とはいっても、正式な逮捕ではない。まだ「容疑者」である。

白い鉄格子のはめられた部屋へ、おれは入れられた。入る際、手錠と腰縄ははずしてくれた。

部屋には、既に二人の男がいた。一人は髪の毛がボサボサで、めがねをかけていて、ぐったりとしている。もう一人は、力強そうな男で、まゆげが太い。

おれは、この二人のどっちかに分類されたら、めがねをかけているほうに入れられるだろう。めがねはかけていないし、ぐったりもしてないし、髪の毛も整っているけれど、運動が嫌いで、ゲームが大好きだ。力強そうなほうは、あきらかにスポーツが得意そうなので、おれとは全然違うと思う。

正直言つて、おれはこの二人よりはかつこうがいいと思っている。よく、小学生時代に女子からもてはやされたものだ。その女子たちに手錠と腰縄をつけたおれを見られたら、なんといわれるであろうか。

さて、今まで話していなかったが、おれが捕まった理由を教えてやろう。「万引き」だ。それも、盗んだものは9円のうまい棒。我ながら、馬鹿なことをしてしまったと思う。おれは貧乏で、両親とも音信不通だが、9円くらいの安いお菓子なら買えないこともない。

ここで、他の二人に留置場に入れられた理由を聞いてみた。めがね

をかけているほうは、殺人だという。殺人犯と同じ部屋だなんて、なんとも恐ろしい。

まゆげの太いほうは、トラックでひとをひいてしまったかららしい。そのひとは死んでしまったので、罪が重くなるぞ、と、警察官からおどされたそうだ。だが、故意ではないようなので、どっちかという、いいひとなのかもしれない。

さて、それからしばらくしておれは裁判をうけたわけだが、判決は懲役2年で5年の執行猶予つきであった。もちろんおれは執行猶予のほうを選んだ。ついでに、9円の罰金もさせられた。おそらく、うまい棒を売っていた店にわたすものなのだろう。

ここで、他の二人の判決を予想してみた。まゆげの太いほうは、懲役20年はあるそうだ。殺人犯のほうは、もしかしたら死刑かもしれない。

警察署の門から外へ出ると、すがすがしい風がひたいにあたった。

## タイムマシン&自転車（前書き）

二つのショートショートが入っています。

## タイムマシン&自転車

タイムマシン

「やったー！できたぞー！」

「できましたか、博士。」

ここはとある研究所。X博士はタイムマシンを作っていた。  
この日、そのタイムマシンが完成した。

「このタイムマシンは過去には行けないが、未来にはいけるんだ。」

「ふむふむ。」

「そして、部品はほとんどない。」

「ほうほう。」

「つまり、ものすごく軽いのである。」

「へえへえ。では、さっそく乗ってみましょうよ、博士。」

「ああ、わかった。ではのりこんでくれ。」

X博士の助手、YがX博士と一緒にタイムマシンに乗り込む。

「では、まずテストとして五分後の世界へと行ってみよう。」

「はい。博士。」

「スイッチ、オン。」

X博士が、そばにあった赤くて大きなボタンを押す。

五分ほどたったとき、X博士が言った。

「やった！成功したぞ！ここで外にでると、五分後の世界だ。」

「・・・。」

賢明な読者なら、すぐにわかるであろう、このタイムマシンの秘密が。

## 自転車

あるところに、小さな子供がいた。

子供の名前は・・・ここではイニシャルのエムとでもしておこう。  
この子供は、親に自転車を買ってもらった。とはいっても、値段はハンバーガーを食べたらもうなくなってしまふほどの額なので、とてもボロかった。

買った次の日、ブレーキがきかなくなつて、子供は車に当たった。  
子供は一命をとりとめたが、大怪我をした。

## 髪の手&宇宙人(前書き)

二つのショートショートが入っています。



## 髪の手&宇宙人

### 髪の手

佐藤氏は、髪の手の手えすぎで困っていた。

ふつう、髪の手で困ることといえははげだが、佐藤氏の髪の手は、  
どんと伸びていったのである。

三ヶ月前まではほとんど坊主なみに髪の手が短かったのだが、今は  
もう腰のあたりまで伸びている。

ある日のこと、佐藤氏は発毛薬品をとりあつかっている会社に相談  
してみた。

「髪の手を抜くことができる薬はありませんか。」

「ありますよ。使ってみますか。」

「ありがとうございます。おいくらですか？」

「三万円です。」

少々高いが、まあこれも仕方ない。佐藤氏はさっそく薬を持ちか  
えて、頭にふりかけてみた。

三ヵ月後、佐藤氏の髪の手は完全になくなって、頭のはげあがって  
いた。

「なんという薬だ。はげちゃ意味がないじゃないか。」

### 宇宙人

ある日、地球に怪しげな光の物体が墜落してきた。

光は、案の定UFOであつた。

UFOからは、緑色の三頭身ほどである目が赤い生物がでてきた。これが、宇宙人なのだろうか。

「……？；（、？！」

なにやら喋つたようだ。だが、意味がわからない。

地球人は、何だかわからないというジェスチャーをした。

すると、宇宙人はカプセルのような薬を地球人に差し出した。

地球人が薬をのむと、宇宙人のことばがわかるようになった。

「おれは、宇宙人だ。手厚く出迎えにあがるように。」

宇宙人は、かなり態度がでかい。

宇宙人をパーティに招待した地球人は、ある異変に気づいた。

まわりにいる人間の考えていることがわかるのだ。

宇宙人にきいてみると、先ほどのんだ薬はテレパシーで相手の考えていることがわかるということを教えられた。宇宙人がこの薬をのんでいたとしたら、われわれの考えていることはお見通しなのだろうか。むやみに何かを考えることもできない。

宇宙人が帰つたあとも、薬をのんだ地球人は相手の考えていることがわかつていた。

だが、人ごみの中を歩けなくなった。脳が、人々の考えている情報を全てとりこんでしまったためだ。

とんでもない薬をのんでしまった。薬をのんだ地球人は後悔した。

## 全自動ロボット

2120年1月2日、片山氏はほとほと困り果てていた。

2120年1月1日に、全自動ロボットというものが開発された。自分の体にロボットの装置をうめこみ、思ったことを、体内のロボットが感知して体を動かすのである。

つまり、「トイレに行きたい」と思うだけで、体が勝手に動き、トイレに行くことができるのだ。

このロボットは、体が不自由なひと、高齢者、めんどくさがりやのひとに人気だった。

片山氏は、めんどくさがりやなので、さっそくにロボットをうめこんだ。

だが、思ったことをそのまま感知してしまうので、生活がしくくなかった。

体に装置をうめこんだ直後、たまたま「このコンサート見に行きたいなあ」と思うと、勝手にコンサート会場へ連れて行かれ、二時間ほど席に強制的に座らされた。

また、同じ時に複数のことを考えると、めちやくちやになる。

たとえば、「ピアノを弾きたい」「食事をしたい」「トイレに行きたい」と同時に思うと、トイレの方向、ピアノの方向、ダイニングの方向に体がひっぱられ、大変なことになったのだ。

そのときは、「体が痛いのでひっぱられるのをやめたい」と考えて、かろうじて助かったものの、これではまともに生活ができたものではない。

だが、装置をはずすわけにはいかない。心臓に近い部分にうめこん

であるので、除去しようとなれば命の危険が伴うし、お金もたくさんかかるのだ。

そして、今日、片山氏にとんでもない事件がおきた。「飲み物が飲みたい」と思ったら、トイレに顔をつっこまれたのだ。汚い上、息もできなくて、片山氏は死にそうになった。

片山氏のように、困っているひとはたくさんいた。あるひとは、「あのひとを訴えたい」と思うと、「訴えたい」が「歌いたい」に感知されたようで、「あのひと」という曲を強制的に歌わされた。ほかに、殺し屋が「ひとを殺したい」と思うと自分を殺しそうになってしまったり、スーパーの店員が「レジを開きたい」と思うと口が勝手に開いたり、とにかくひどかった。

殺し屋の場合は人殺しを阻止できてよかったかもしれないが、そのほかの場合はかなり困る。

そして、とうとう装置を開発したひとが訴えられた。だが、開発側が勝訴してしまった。

なぜだ？と装置を体にうめこんだひとが言っと、開発側は、「『思ったことを行動にうつす』んです。そのことを頭にいれておいてください。」と、うめこむときに言ったはずですよ。」とだけ言ってどこかへ去ってしまった。

## 夢の超特急

中田氏が住んでいる板垣市を走る鉄道、板垣鉄道。この鉄道には、「夢の超特急」というものが走っている。

行き先が不明という、変わった列車だ。

中田氏は、今日この列車に乗りうと、チケットを買い、板垣駅まで行った。

板垣駅には、金色の列車が到着していた。これが、夢の超特急である。

中田氏が座席につくと、早くも列車は出発した。出発してすぐ、こんなアナウンスが流れた。

「永遠に夢の世界へといざなう夢の超特急、ただいま出発しました。」

短すぎるので文字数あわせ

あいうえおかきくけこあいうえおかきくけこあいうえおかきくけこ  
あいうえおかきくけこ

あいうえおかきくけこあいうえおかきくけこあいうえおかきくけこ  
あいうえおかきくけこ

あいうえおかきくけこあいうえおかきくけこあいうえおかきくけこ  
あいうえおかきくけこ

あいうえおかきくけこあいうえおかきくけこあいうえおかきくけこ

あいうえおかきくけこ  
あいうえおかきくけこあいうえおかきくけこあいうえおかきくけこ  
あいうえおかきくけこ  
あいうえおかきくけこあいうえおかきくけこあいうえおかきくけこ  
あいうえおかきくけこ  
あいうえおかきくけこあいうえおかきくけこあいうえおかきくけこ  
あいうえおかきくけこ  
あいうえおかきくけこあいうえおかきくけこあいうえおかきくけこ  
あいうえおか  
あいうえおか

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1389g/>

---

ショートショート集

2010年10月22日01時41分発行